

通訳への配慮

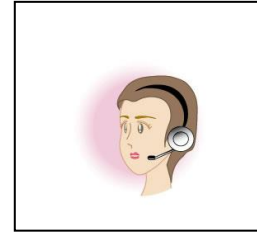
私がこれまで接した通訳人との会話や、日露通訳であった故米原万里の一連の著作で知ったことで、「そういうものなのか」と思ったことがある。それは、通訳に良かれと思って事前に読み上げ原稿を作り、その原稿のとおり読む方式は、実は通訳にとっては困る・・・というもの。

同時通訳と逐次通訳では、その能力の鍛え方・磨き方がちがうのだが、両者とも、読み上げは困るというのが興味深かった。その理由は、原稿は文章が練ってあるので密度が濃い、つまり「遊び」がなく、省くわけにもいかず、通訳しにくいとのこと。

また、話者が文章を読んでいるのだが、実はその話者の思考は止まっており、字面を追っているだけ。実に不思議なことに、話者が考えていないとその考えや内容が訳者にも伝わりにくく通訳困難。理屈ではないそうです。もちろん達人レベル、逆に初級レベルだと問題ないのかも知れない。

次に、同時通訳も逐次通訳も、文章を読まれると紙に目が行く。しかし、の通りに話しているかが気になり、聴かねばならず、注意力が分散するので通訳しにくい。通訳が最も困るのは、話者が何を考え、何をどのように話すかを把握しにくいことだそうです。逆に言えば、この人は、大体の話の内容を、こんな思考方法で話すというのが分かれば、原稿がなくても通訳しやすい。

これを知ってから私は、(日本語の場合ですが)、①分が話す内容を書面で用意、②その書面(代わりに参考文献でも可)を事前に渡す、③本番ではその範囲内で話す、④ただ順番も表現も違う(その場で考えて話す)、というようなことを心掛けています。(山下輝年記)



Web セミナーの裏舞台

オンラインセミナーは参加者には便利で評判がよいものです。しかし舞台裏の事務量は半端ないものです。これを2021年9月2日開催のフィリピンセミナーで実感しました。主催のフィリピン側(CPPAP)は、テーマや講師の選定、オンライン発信拠点を担い、ACPF事務局は、その内容を日英で作成、ご案内通知と調整を担いました。関係者は多岐にわたり、在フィリピン日本企業、国内ACPF会員、UNAFEI同窓生、国連NGO犯罪防止刑事司法連盟会員機関等と膨大な量のメールのやり取りとなりました。

加えて、同時通訳手配はACPF事務局担当で、初のことで戸惑いは多く、あらゆる想定が必要でした。仮にACPFだけの主催となると、間違いなく全員が倒れてしまう業務量になります。

ですがオンライン開催になったことで、通常の3倍近い方が参加し、その強みを感じました。Webセミナーで発信したいという意欲と、事務量に圧倒される不安が交錯してしまいます。

今回のセミナーができたのは、CPPAPとの強い絆があったためです。UNAFEI卒業生がCPPAPにいて、またACPF名古屋支部と昔からの友好関係があってこそ、今回のオンラインセミナーに繋がりました。この絆はin personでなければ築かれなかったものです。また、UNAFEI参加者が研修最終日に涙を流しながら別れを惜しむ姿はオンラインでは無理です。

早くコロナが終息し、以前のようなUNAFEI研修が再開されることを願うばかりです。その上で海外との距離がぐっと縮まるオンラインを活用できればと思います。(竹内記)